地域の教育力とは何か
―被差別部落における子育て・親育て―

木村　和美[1)]

What is Community Education Power ?
― Child-rearing and Parents-rearing Activities in a Buraku Community ―

Kazumi KIMURA

Key words：community education power，family education power，multilayered network
キーワード：地域の教育力，家庭の教育力，重層的なネットワーク

1．はじめに

「地域の教育力」に注目が集まるようになって久しい．清水（1980，pp.198-199）は「かつて地域社会は，強い教育力をもっていた．…地域はどこも学校であり，おとなはみな教師であった」と述べており，地域が子どもたちの成長にとって重要な役割を担っていたといえる．しかしながら，高度経済成長期にはすでに地域の教育力の低下が起こっていたと考えられる．第二次産業，第三次産業の興隆に伴い都市化や核家族化が進行していった結果，地域共同体に対する帰属意識は薄れ，地域の教育力の低下を招いたといえるだろう．

1996年の中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」においても，「地域社会での活動を通しての子供たちの生活体験や自然体験は著しく不足していると言われ，また，都市化や過疎化の進行，地域における人間関係の希薄化，モラルの低下などから，地域社会の教育力は低下していると言われている」と述べられており，地域の教育力を向上させるための取り組みが求められている．

池田（2000，p.173）は，「気がついてみると，学校教育や家庭教育を支えていた地域教育がいつのまにか大きく地盤沈下していたのである．地域教育が学校や家庭を支えるどころか，かつて地域教育が担っていたものまで家庭や学校に投げ込まれているという状況に至っている」と述べており，地域の教育力の低下が，社会的・経済的背景の厳しい家庭をさらに追い込んでいるといえる．

そこで，本報告では被差別部落A地区[注1)]の保護者たちによる教育実践を事例に，社会的・経済的背景の厳しい家庭を支えるための地域の教育力について検討を行う．

2．被差別部落における教育力

被差別部落では，「しょうゆや米の貸し借り」，「親戚づきあい貧乏」（西田，2001）として語られることが多い「助け合い」や「分け合い」の文化の下でコミュニティ・ネットワークが形成されてきたこともあり，今なお，地域の共同性が強く残っているといわれる．

その一方で，被差別部落には，自身が子ども時代に経済的に苦しい生活を強いられてきたため，せめて子どもには物質的な面で苦労

1）スポーツ学部

をさせたくないという思いから「娯楽的モノ志向」を示す家庭が多く（神原，2000；鍋島，2003），大学進学資金の準備率の低さや予備校・学習塾に通わせる率の低さなどが示されている（鍋島，2003）．一見すると豊かな生活を送っているよう見えるが，本来ならば，将来のための貯金に回されるべきお金が，一過的・娯楽的消費財に消えていってしまっていると考えられる．このような家庭環境は，子どもにとって長期的な見通しをつかみにくい環境であるといえる（高田，1996；鍋島，2003）．保護者の多くが教育の機会を奪われ，働くのに精一杯で子どもの教育に関わることができず，そして，保護者に関わってもらえなかった子どもが保護者になったとき，子どもをどのように教育したらよいのか分からないという形で再生産が繰り返されてきた．そのため，保護者の教育に対する不安は根深く，家庭の教育力の弱さが指摘されている．

1991年に部落解放同盟大阪府連合会は，「子育てに強い親を，ムラの共同子育てに取り組む保護者組織を」という提言を行っており，近年，被差別部落において，これまで教育を学校や社会教育施設に頼りすぎていたのではないかという反省のもと，家庭の教育力向上を課題とし，地域社会全体で子どもを育てていこうとする動きが起こっている．

このような状況のなか，被差別部落A地区では，2001年に保護者組織「A保護者会」を設立し，各家庭が助け合いながら，地域社会全体で子どもを育てていこうとする取り組みを始めたのである．

3．社会的・経済的背景の厳しい家庭を支える地域の教育力

A保護者会の教育実践から，社会的・経済的背景の厳しい家庭を支える地域の教育力とはどのようなものなのかについて考察を行った．その結果，①家庭の教育力の補完，②重層的なネットワークによる子育て・親育て，③情報の窓口，④「緩衝剤」としての地域，という4点が浮かび上がってきた．

A保護者会のメンバーは，子どもの学習会活動などを通して自分の子どもだけではなく，地域の子どもに対しても積極的に「褒める」，「叱る」ことを行っていた．これは，A保護者会の活動を通して保護者同士が顔見知りになったことから，地域の子どもに関わりやすくなったためだといえる．また，学習会活動の際に，保護者と子どもが上手く関わることができていない場合は，一緒にいる他の保護者が保護者と子どもの両方に「フォロー」を入れるなどの場面が見られた．つまり，メンバー同士で①家庭の教育力の補完を行っているといえる．

A保護者会の活動は学年を交えて行われる．そのため，保護者も子どもも，通常の学校生活では関わることが少ない人々と交流を持つことができる．保護者も子どもも地域のなかでタテ（異学年），ヨコ（同学年），ナナメ（地域のおとなと地域の子ども）のつながりを形成し，重層的なネットワークに埋め込まれることになる．重層的なネットワークは，さまざまな人の手が加わった子育てを可能にすると同時に，保護者も保護者同士で子育てについて情報や悩みを共有し，相談し合うことで「親」として育てられるのである．A保護者会の活動は，②重層的なネットワークによる子育て・親育てを可能にしている．

被差別部落には，長年にわたる差別と排除の歴史や自身の学校経験から，学校文化との親和性を高く持つことができなかったり，学校に対して「敷居が高い」と感じたりするなど，学校と距離を置いている家庭もある．そのため，「地域における保護者組織」として学校からさまざまな情報を受け取ることができるA保護者会は，学校から遠ざかってしまっている保護者にとって③情報の窓口としても機能している．

地域に重層的なネットワークが形成されることによって，子どもの問題を地域で協力し

合って解決することが可能になる．このことは，学校の負担を減らすことにもつながっていく．今日,「学校がしんどい」と言われているのは，家庭における子どもの問題が直接学校に持ち込まれているからだと考えられる．家庭と学校の間に「緩衝剤」として地域が入ることによって，家庭に対する支援の手を増やし，学校の負担を軽減することができる．多忙を極める学校にとって，④「緩衝剤」としての地域の役割は大きいと考えられる．

4．まとめ

A保護者会の教育実践から，社会的・経済的背景の厳しい家庭を支えるための地域の教育力について検討してきた．今後の課題としては，安定層の負担軽減が挙げられる．A保護者会において積極的に活動を担っているのは安定層である．その結果，安定層に負担と不満が蓄積し，一部の安定層がA保護者会から離脱するという状況を招くことになった．また，安定層の離脱は，子どもの教育に対するニーズの多様化とも関係するだろう．A保護者会が提供する教育活動以外に魅力を感じ，そのことに対して投資可能な家庭であれば，保護者も子どもも，限られた時間をA保護者会のために使おうとはしないと考えられる．さらに，子どもの教育に関する活動には，子どもの成長に伴い保護者の世代交代が求められるという問題もある．A保護者会の活動を若い世代に引き継いでいく工夫も考えなければならない．A保護者会が，地域の教育力を継続して醸成していくためには，これらの課題を解決していく必要があるだろう．

地域の教育力向上には，地域の努力だけではなく，学校，家庭，地域が一体となって子どもの教育を推進していくことが重要である．子どもに関する情報を共有し，同じ教育方針の下で，協働して子どもを育てることが求められている．今日，子どもを中心にすえた人間関係の再構築が望まれている．

注

注１）A地区は，大阪府の北部に位置する約800世帯の中規模部落である．調査は2004年に開始し，すでに終了している．

引用文献

池田寛（2000）地域の教育改革学校と協働する教育コミュニティ．解放出版社．

神原文子編（2000）教育と家族の不平等問題　被差別部落の内と外．恒星社厚生閣．

鍋島祥（2003）見えざる階層的不平等．解放出版社．

西田芳正（2001）部落の生活様式　その継承と変化，部落解放人権研究所編　部落の21家族．解放出版社，pp. 175-226.

清水義弘（1980）地域社会と学校．光生館．

高田一宏（1996）学力調査とこれからの学力保障，部落解放研究所編　地域の教育改革と学力保障．解放出版社，pp. 13-29.